

## 対談

三井物産林業(株)札幌  
支店次長兼造林課長

遠藤嘉治氏・境宏氏



## アドバルーン林業からの脱却

### 拡大造林の功罪と天然林施業

S 今の日本の林業の苦しさの一因は、拡大造林のやりすぎからだと思いますが、どうですか。

E 確かに昭和45～6年までの20年間近くは北海道の民有林はたいへんな剣幕で造林をした。私が入社したのは36年だから、この造林狂時代の後半には責任があることになるわけだ。だが、拡大造林も目算もなくやたらにやったわけではないよ。この時代の前半は、木材が独歩高で、たいへん景気がよく、今は気息えんえんとしている商社の木材部も、36年ごろは稼き頭という時代で、造林をすると本当にうかると思っていた。

S しかし、当時でもカラマツの需要は、坑木か足場と決まっていたにもかかわらず、その需要量の数倍の造林をしたのは、どういうつもりだったのかサッパリわかりませんが……。

E その指摘のとおりだが、当時はパルプ材を造林しても計算が成り立つ状況であって、北方林業誌にも計算例が出たりした。とにかく、将来は木材不足の時代が必ず来る、という確信みたいなものがあったね。なるほど、やりすぎや、目算違いがあったことは認めなければならないだろう。だが、君がさっき言った、現在の日本林業の困苦が拡大造林による、ということはよくわからんね。

三井物産林業(株)  
札幌支店事業課係長

境宏氏

S 針葉樹造林木の供給過剰状況を作りだし、おまけに手入れ不足によって林地を荒廃させ一先日テレビでヒノキの間伐遅れ林を放映していましたが、下草がないため土壤が浸食され根がうき上がっていました—その上広葉樹資源を減少させ、今ごろになって、シイタケほど木林の造林などやっているのだから大笑いだと思いませんか。

E そう詰め寄られると面白いような気がするが、君の言うようにマイナス面ばかりではないと思うよ。今、君らが商売にしているカラマツの梶包材は拡大造林の成果であるし、北海道の私有林の蓄積が戦後から3.5倍にもなったという点は評価してもよいのではないか。

S しかし、今言われたカラマツも木代金があるかないかの状況であって、再造林をする人がいないというではないですか。北海道では天然林施業をやるのが一番よいと思います。現に業界紙の座談会で、ある局長さんが、北海道は人工林率が低いからまだたずかる、ということを言っていました。

E そういう意見の人もいることはいる。現に本誌の昨年9月号にもそういう内容の座談会<sup>注)</sup>

注) 北海道の森林施業を考えよう—優良木を育て活用するるために— 早稲田 収、高橋二郎、古田昭司の3氏による鼎談 ウッディエイジ 1984年9月号1A～8A

があった。もしかしたら君はあれに影響されたのではないかね。

**S** あれは私も読みました。あのなかの早稲田さんの意見には賛成です。

**E** マア若い人は、いろいろな意見を取り入れるべきだろうが、林業にはその時代を支配する風潮というべきものがあって、それを端的に表すためアドバルーンを上げて動いている面もあることを注意したほうがよい。

**S** そうするとあの話は間違いだというのですか……。

**E** イヤ間違いだというわけではない。現時点でああいう考えもあると言うことだ。確かに山林所有者の立場に立てば、必要な木をドンドン採採して、跡地の造林をしなくてすむならこんなよい話はない。だが、拡大造林は官行盜伐と言われた戦前の伐採の反省の上に立っているものであり、北海道で確実な更新は人工植栽しかない、ということを無視してはいけないと思うよ。もし今、拡大造林をやめたらどういうことになるかね。山で働いている人は今の1／10以下になり、その管理機構もその割合ですむことになる。例えば、道有林では大正14年に全林務署に110人の吏員と90人のその他の人人がいた。昭和46年には技師と主事が710人、その他が270人いたことになっている。大正14年とて1000haの造林をやっていてこうだ。だから天然林施業に戻すと大変な失業者が出ることになる。

**S** そうすると人を雇用するために拡大造林をするということですか。

**E** その面は確かにある。とにかく、現実に現造林量にみあった人々が働いており、若干過剰ぎみであるということを忘れてはいけない。森林組合などどうなるか想像を絶するね。

**S** それなら、この人々が天然林の保育をすればよいでしょう。

**E** 馬鹿を言っちゃいけない。天然林の保育と人工造林では労働力の密度が桁違いだ。もし、この多数の人間が一斉に天然林に手をつけたら、北海道の山はわけのわからんうちにおかしくなる

よ。その点、人工林は失敗するとはっきりわかるという利点があり、労力の集中投入に向いている。

### 高品質材の育林

**S** 何だか話が政治的すぎて森林不在の論と思えますが、いずれにしろ、拡大造林の成果はこれから問題であることはたしかなことでしょう。それで、このごろ銘柄林とか、高品質林を志向する動きがあり、本もいろいろ出ていますが。

**E** 君は本々というが、拡大造林華やかなりし頃、これについての本が何百冊出たか知っているかね。特に今も高名な林業評論家の方が書いた“密植造林”という本は、拡大造林時代の考え方の精華というべきものであるから是非読んだらよい。

**S** そんな本があったのですか。だが、林業も世のニーズにあった育林をしなければということは本当でしょうね。

**E** それは理想だ。君は“父母に孝に兄弟に友に”ということが実行できるかね。

**S** 何んですかそれは。林業と関係なさそうですが。

**E** 世の中には理想を実現できると考えている人がいる。しかもその理想を観念の中で組み立ててしまうという始末の悪い人がけっこういる。

**S** 抽象的でよくわかりませんが。

**E** 例えば、高品質材育成の技術がそれだ。現在無節の大径木が売れるからといって、セッセと枝打ちをしたとする。50年後に本当にそんな需要があるのかね。無節のパルプ材なんてゾッとしている話だ。

**S** しかし、節がない方がよいでしょう。

**E** 節があった方が木らしくてよいという変わった人もいるが……しかし、節をなくすためには金もかかり時間もかかる。だいたい嗜好という奴は気まぐれなもので本気で付き合う気にはならない。30年ごろケヤキの大木が捨てられているのを天城で見たことがある。

**S** 今なら大変な銘木でしょう。

**E** そうだ。銘木にもはやりすたりがある。並材

でもその通りで、今モテているナラの5年前を考えればよくわかるだろう。

S そうすると、どうせ将来のことはわからないのだから無駄なことをするなということですか。

E 品質は普通でも安いものを多量にということがあるべき姿であって、それをうまく加工して付加価値を付けるのが本来の姿だ。

S 遠藤さんにしちゃめずらしくベキ論ですが、これが林産試の方々の目にも入るから世辞を言っているのでは……。

E 木材の利用の歴史をみても、必ず未利用資源を利用する技術が開発されていく。ブナのフローリング、アカマツ、広葉樹のパルプ化をあげることができる。大体利用技術はアキレスで育林技術はカメと言ってよい。だから需要に合わせた育林事業はヘタをすると逃げ水を追いかけることになる。

S それじゃあまりにも無目的で育林のしようがないでしょう。

E だから実際には、いろいろと組み合わせて育林をすることにしている。ついでに言っておくが、君のきらいな拡大造林は広葉樹のパルプ化の利用開発によって大いに促進されたということであって、言ってみれば拡大造林は正しくニーズに合わせた林業であったということだ。

### 林業史のすすめ

S 何だか昔話でごまかされているような気がしますが、僕は現在の問題をどう解決するかという現実的な質問をしているつもりですが。

E そう取ったとしたら理解不足だ。林業の場合、現実の問題をはじめに考えて解決しようとすればするほど悪い結果を生むことが多いことに気が付かなければいけない。

S そんな馬鹿な話はないと思います。

E これは歴史的事実といえる。例えば外国樹種の導入がそれだ。あれはカラマツ先枯病に対する切実な要求から発生したものだ。

S しかし、先枯病の場合は急なことで拙速な対

応をした特殊な例でしょう。

E だが、現実に解決しなければならない問題といふものは、それぞれ特殊性を含んでいるものだ。だからその情況に対応しようとすると、その特殊性を過大視してしまうことになる。この結果、明治以降の林業の歴史は過剰反応の歴史といってよい。

S 拡大造林はその好例でしょうが、そんな昔からあったんですか。

E そうだ、昔の人の方が妙な信念があったからその傾向は強いようだ。アカマツは一年生苗木造林に限るとして三年生苗木を焼き払うとか、下刈りをするなど、ものすごい話がある。特に秋田局からは面白い人がでている。大正10年あたりからスギの一年生苗木造林をやったと思うと、昭和になると択伐作業に転換し、更新不良地の植え込みまでしてはいけない、ということになった。

S 何やら気違ひじみた話で、信じられませんが一体どうしてそうなるのでしょうか。

E 変わり身が早く、ナダレ現象的行動をする日本人の特性と言えばそれまでだが、林業の場合、経験の少ない人間の声が大きいという特殊事情も一層この傾向を加速している。ある人がこういう人々を“背広を着た林業人”と呼んだ。背広にネクタイで机に座って林業を論じている人のことだ。林業の場合3～5年の現場経験は経験の内に入らないということがわかっていないから始末が悪い。そのうえ、林業関係者と呼ぶべき人々も多数いて、この声が一番大きい。学校の先生、試験場、林業団体、公務員の一部がそれだ。我が国の林業の過剰反応はこれらの人々のあげたアドバルーンによって動かされたといってよい。もちろん全部の林業関係者がそうだと言うわけではないがね……。

S しかし、経験がないからといってどうということはないと思います。むしろ物事を客観的に見ることができるはずですが……。

E 一般的にはそうだ。だが、林業の歴史を調べると、どうしても先に言ったような結論になる。私も数年前まではこのことは戦後の現象だと

思っていたが、どうもそうではないらしい。先の苗木焼却事件も学校出たての学士が事務官の局長をせん動してやったことだし、秋田局の択伐も外国かぶれの産物だと思う。ただ一年生苗木造林は現場からの技術らしいが、時の山林局の課長が悪乗りして全国的におしあげたものだ。北海道山林史を書いた津村昌一は斎藤音作の傘伐更新論、志和地栄介の択伐論も実地からものではなくて外国の理論の借り物だ、と言っているのには仰天したね……。

S 何だか昔のえらい人をナデ切りにしてしまったようですが。

E そうではない。決して先人の悪口を言って喜こんでいるわけではない。なぜこういうたわいのない論が一世を風びしたのか反省するために言ったのだ。これがアドバルーン林業の恐ろしさだ。

S なるほど、今もアドバルーンが上がっているぞと言いたいのですか。

E とにかく、これらのアドバルーンは、その時の社会情勢、特に経済状況を切り抜けるよい方法であるため世に受け入れられやすい特徴がある。例えば、金がなくなると造林をしたくななる、という単純な事実をひとひねりして、恒続林、生態学、公益機能等々の衣装で覆いかくしたアドバルーンを上げると、人々は渡りに舟と飛び乗り、一種の集団自己欺まん状態が作り出されるのだ。しかも大部分の人はそれに気づかず、アドバルーンを本気で信用するから面白いことになる。

昭和の初め、特別經營事業の保育費の増やら不景氣で国有林経営が苦しくなる、という状況で上がったアドバルーンが恒続林であった。近藤助が当時のことを旧懐して“その頃択伐を口にしなければ一人前の林業技術者ではなかったようです。私は昭和3年学校を出てから……択伐作業が怒とうのように押し寄せて束の間に国有林の林業を支配してしまった”と述べている。

S そうすると、その時代の風潮から抜ることはできないということですか。

E その通りだ。拡大造林時代もそうだった。ムー

ドだけならどういうこともないが、政策もすべてその方向に向くから従わざるを得なくなる。

S 何だか絶望的な話ですが、せめてそのアドバルーンを見破る方法でも教えてください。

E まず、あまり具合のよい話があったら、なぜ今までそれが広く行われなかつたかよく検討してみるとよい。必ず何か問題点がある。そのことを無視したものがアドバルーンだ。複層林、混交林、広葉樹造林などその例で、それぞれ理由があつて広く行われないので。特に、広葉樹造林を気軽に言う奴はぶんなぐってやりたくなる。

S 遠藤さんはかなり広葉樹を植えているのにそんなこと言つていいんですか。それはそうと、今言われたことも経験不足ですと問題点を見付けることができませんが……。

E それはそうだ、だから一人前の林業家になるには最低10年はかかる。だが、それが待てないというなら、林業史を勉強するとよい。江戸時代までさかのぼる必要はないが、明治以降は先に言った大小のアドバルーンがあつてなかなか面白い。だが、以前から気にかかっているのだが、学校に林業史の講座がないことは不思議なことだ。森林ぐらい過去のシガラミによって成り立っているものはないと言うのにね。

S そう言われてみると私も林業史を習った記憶がない。何かよい本はないですか。

E そういう安直な考えが背広を着た林業人の悪いところだ。手頃な林業史の本があったとしても、本を書くのは林業関係者であるから、視点がちがうためアドバルーン見破り用にはならない。今のところは、いろいろな本の行間を読むことをすすめるね。マア定年にでもなつたら“日本林業を誤らせた100人”といった本でも作つてみようと思っているから、その時まで待つていたらどうかね……。

S それはキツイ冗談で。私も“林業技術誌”掲載中の物語林政史を時々読んでいますが、遠藤さんの話されたようなことが書いてありました。

E あれはなかなかよい視点だ。早く戦後編にならないかと待ち遠しい。